九十九里浜における映像資料にもとづく漁業の盛衰と漁民の砂浜認識の変遷

清野聡子[1]・宇多高明[2]・酒井英次[3]・吉田哲朗[4]
Satoquo SEINO, Takaaki UDA, Eiji SAKAI and Tetsuro YOSHIDA

[1]正会員　工博　東京大学大学院総合文化研究科　助手（〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1）
[2]正会員　工博　財団法人土木研究センター審議役なぎさ総合研究室長（〒110-0016　東京都台東区台東1-6-4タカラビル）
[3]財団法人シップ・アンド・オーシャン財団　ＳＯＦ海洋政策研究所（〒105-0001　東京都港区虎ノ門1-15-16海洋船舶ビル）
[4]日本財団公益福祉部環境・福祉課（〒107-8404　東京都港区赤坂1-2-2）

かつて九十九里浜には緩勾配の砂浜と豊かな漁場があった．海浜には漁港はなく，漁船は砂浜から押し出し，引き上げなければならなかった．これが女性達による厳冬期の「おっぺし」と呼ばれる過酷な労働である．困難を極めた出漁時の肉体労働の過酷さが漁港整備の要望に繋がった．当時使用した木綿漁網は漁のたびに乾燥させる必要があり，強度も弱く絶えず網繕を行う必要があった．これには広い砂浜が必要であり，広大な砂浜は地域の財産であった．しかし昭和40年代に漁網の化学繊維化が進むと干場としての砂浜の価値は急速に消失した．漁港整備で女たちは重労働から開放されたが，この変遷と同時期に海浜環境にも激変が起き，漁獲量が急減し，九十九里浜固有の自然に応じた歴史文化や風物詩の多くが消えた．

Key Words : *Kujukuri coast, past photographic records, 'oppeshi'*

1．まえがき

2000年より施行された新海岸法では，砂浜の重要性が位置づけられた．砂浜の保全や再生では，地域の個別性に応じた自然認識や価値観をもとにした計画が不可欠と考えられる．その際には，地域性や，地域の変遷の時間的経過を詳細に調査する必要性がある[1)2)3)]．
ある地域にあっては砂浜の価値は時代を通じて常に重要視されてきたのではなく，自然や社会の状況に応じて激変した地域もある．しかし，砂浜への自然認識と社会経済条件の対応関係に関する具体的な解析例は乏しい．近年侵食の著しい九十九里浜の保全計画の作成上，この点が根本問題として提起された．そこで漁業者，地域写真家へのヒヤリング，漁業情報・郷土史資料の解析を行った．さらにイワシ漁業者の砂浜認識は，巻網漁業者にヒアリングを行って調べた．

2．写真家（小関与四郎氏）の写真資料に基づく過去の漁村の復元

九十九里浜では，漁業や民俗学など多分野の歴史的情報が残されている一方で，海岸線付近の土地利用の変化や海岸侵食により自然海浜地が大きな変貌を遂げ，それに伴って固有の海岸の歴史・文化も急速に失われつつある．小関与四郎氏は九十九里浜在住の写真家であり，氏は九十九里浜の漁村の生活について多くの写真を撮影してきた[4)5)6)7)]．本研究では，この写真資料に注目し，今回小関氏所有の映像のうち九十九里浜に関連する写真をすべて画像情報に取り込み，それらをもとに写真を分類整理した．氏の1000 枚以上の古写真には，昭和30 年代以降の九十九里浜の変遷が残されている．この資料を分野別に整理し，自然と社会条件の変化との対比を行った．また九十九里浜特有の「おっぺし」については，当時の就労者のヒアリング調査を行い，海岸集落での女性史としてもとらえた．

(1) 漁村の風景（写真-1）

浜には引き揚げられた数隻の木造船が並ぶ．遠くには松林とその前に集落が見える．その間の砂浜を人々が桶などを持って行き来している．背後の集落と広い砂浜，および浜へ引き揚げられた漁船が九十九里浜の特徴をよく表している．当時は海岸護岸もなく，集落から海へと空間的に連続していたため，砂浜は前庭のような存在であった．

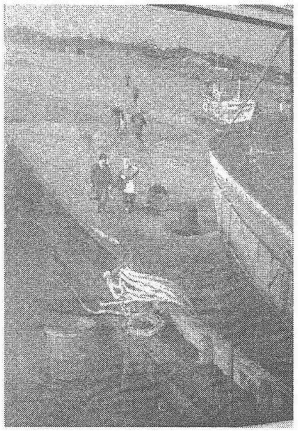

写真-1 九十九里浜の漁村

(2) 漁労（写真-2, 3）

20人近くの漁師が一斉に揚繰網を手繰っている．巻網船では，親方の下のチームとして大勢の船子が働くため，大量の労働力を必要とした．親方には，漁獲を上げる判断力や，チームをまとめるリーダーシップが必要とされ，低漁獲が続くと親方は交代しなければならなかった．

揚繰船から勢いよく揚繰網を引く．全力を出して網を手繰っている．今日は大漁であろうか胸が弾む．この作業は実際の肉体労働としては厳しいものであり，歩合制で収入も不安定であった．そのため，船子は雇用条件がより良いと，同時期に県内で開発された京葉工業地帯の工場へと転業し，漁業者の第二次産業への移行が進んだ．後に労働力の不足を補い，漁労を近代化するため，揚網作業は機械化された．その結果，漁村の漁業人口が減るという結果も招いた．

(3) 浜での労働（写真-4, 5）

沖での漁獲は男性の仕事であったが，浜での水揚げや選別，運搬作業には女性の労働力が不可欠であった．漁村の女性の労働は，漁業者人口として計測されないため統計上動態が把握しづらいが，これらの写真記録にみられるように，漁村全体が生産の場として回転するために不可欠であった．

漁船の船倉から陸に揚げる作業も，女性たちが船倉に体ごと入って行っていた．現在では，機械化でクレーン

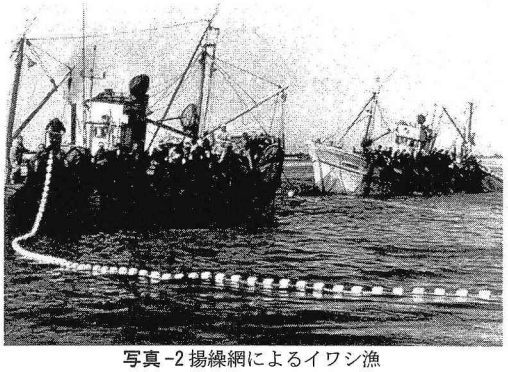

写真-2 揚繰網によるイワシ漁

写真-3 勢いよく揚繰網を引く多くの漁師達

写真-4 浜に運ばれたイワシの水揚げ風景

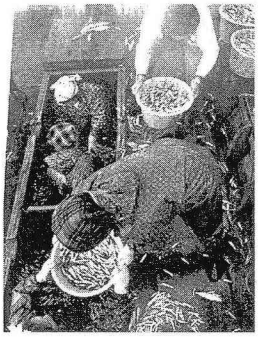

写真-5 イワシの水揚げ風景

が行う作業である．漁獲物は鮮度を争うために，昼食をゆっくりとるなどの時間が確保できなかったという．選別後の，加工場への運搬も女性たちが行うこともあった．

(4) 地引網（写真-6, 7, 8）

九十九里浜のような砂浜から砕波帯を横切って出漁するには，このような特徴的に船首が張り出したデザインの漁船が必要であった．舳先に立つ漁師は高い波の彼方を見る位置に立っている．船尾では，数人の男達が船を押している．波により陸側に押し戻された時に巻き込まれる危険性もあった．勇壮な光景であるが，このような男たちの困難を極めた出漁と，後に述べる女たちによる「おっぺし」が，地域の願いとしての漁港の整備に繋がっていった心情はこの写真からも想像に難くない．

子供を背負いながら，手だけでは力が入らないために腰には，地引網の幹縄に繋いだベルト状の枝縄をつけて網を引っ張る女性．子供はぐったりと寝込んでいる．女性たちは，家事，育児だけでなく出漁の補助，曳網作業，運搬・加工の漁村の労働も行い，休養する時間がほとんどない日々の暮らしであった．

背後に汀線が見える位置で地引網の水揚げが行われた．漁村にとっての砂浜は荷揚げ場でもあった．沿岸性のカタクチイワシと思われるが肥料用の干鰯として重用された．昔，このような風景は九十九里浜の各所で見られたが，漁獲量の減少とともに廃止された．現在では観光目的の地引網がわずかに行われているのみであり，大漁はきわめてまれである．また九十九里浜では，地引網を引くべき砂浜自体の消失が急速に進み，海岸にアクセスができなくなったり，漁場自体が喪失し存立しなくなっている．

(5) イワシ類の加工（写真-9）

江戸時代より九十九里浜沿岸はイワシ類の漁場として注目を集めてきたが，冷蔵・冷凍技術が発達するまではイワシ類は伝統的に干物として加工されてきた．食用のためには砂が混入しないように地面から離した網の上でイワシ類を干した．肥料用の干鰯は，日射で温まった砂浜表面に直接撒き乾燥させた．腐り易いイワシ類の干物づくりは，水揚げ場近くに陽当たりと通風の良い広い空間が必要であった．砂浜はまさにそれに最適の場所であった．写真には，干場の先の海浜に引き揚げられた漁船が一隻見え距離感がわかる．

漁村地先の砂浜の空間利用は，このように共有地的な作業場，加工場でもあったため，現在とは比較にならないほど注意深く管理されていた．ゴミの投棄などは公共益を阻害することになった．その後，室内での

写真-6 激しい勢いで迫る砕波を突き破って沖へ出漁する船

写真-7 子供を背負って地引網を引っ張る女性

写真-8 地引網でイワシの大漁だ！

写真-9 海浜でイワシの干物を作る人々

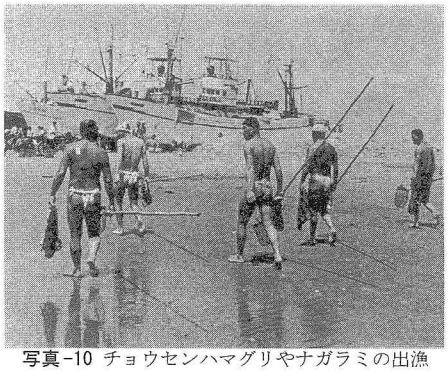

写真-10 チョウセンハマグリやナガラミの出漁

電力による乾燥技術の発達によって，砂浜の干場としての機能は漁村にとって不必要となり，終日働く人の姿も消えた．

(6) 貝類漁業（写真-10, 11, 12）

九十九里浜は，貝類漁業も盛んであった．現在でも，チョウセンハマグリやナガラミの主要漁場であるが，過去には比類がないほど漁獲があった．

激しく波が砕け散る中で，首まで海に浸かって貝類漁をする男達．砕波帯での貝類漁業は，海岸の力学をうまく利用した方法である．長い棒のついた籠を海底に突き刺し，砕波のエネルギーを利用して陸側に牽引して貝類を掘り出す．現在でもこの漁法は取られているが，人数は少なくなっている．

遠浅の海浜である九十九里浜はチョウセンハマグリの採取適地である．女性の左に下げられた網袋には採取された大量のハマグリが見える．波打ち際でジョレン（鋤簾）により海底面から掘り出す採貝漁である．ハマグリは単価が比較的高かったため，女性によるこのような漁労も家計の助けには十分なっていた．しかし，貝類資源量の低下によりこのような漁業は縮小している．さらに，九十九里浜のなかでもかつて漁場だった遠浅の砂浜が侵食で消えた地域では，浜での採貝の継続は不可能であった．

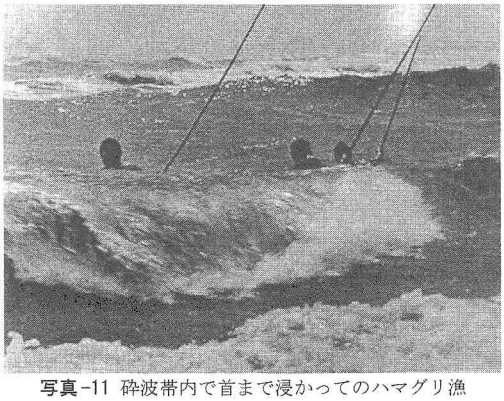

写真-11 砕波帯内で首まで浸かってのハマグリ漁

写真-12 ハマグリ漁を終えて帰る女性

(7) おっぺし（写真-13, 14, 15）

九十九里浜は海浜勾配が非常に緩やかであったために，浜への漁船の揚げ下げには大変な労力を要した．写真-13は，浜から海へ漁船を下ろす際，砂にはまって身動きの取れなくなった漁船を多くの女たちが「おっぺし」ているところである．このように船が砂に埋まって身動きが取れなくなることを「いどこ」と呼んだ．身動きが取れなくなると，場合によっては漁船が自由になるのに満潮時まで待たねばならなかった．

九十九里浜は海浜勾配が非常に緩やかであったために，浜への漁船の揚げ下げには大変な労力を要した．3人の女性がほとばしる波濤の中，漁船を押している（写真-14）．今まさに砕波帯を押し分けて漁船を沖へと押し出している．力強い容姿が全力で船を押していることを彷彿とさせる．泳ぎの巧い女性は，浜に帰ってきた船を牽引する綱やワイヤーを肩にかけ，砕波帯を泳ぎ切って船に渡す役割を引き受けていた．このような困難に耐えてきた多くの女性達の声が，やがて漁港を整備してほしいという願いに繋がっていった．現在では想像することさえ難しい風景である．

おっぺしたちは，冬季でも防寒潜水服などもつけず

写真-13 砂にはまって身動きの取れなくなった漁船の「おっぺし」

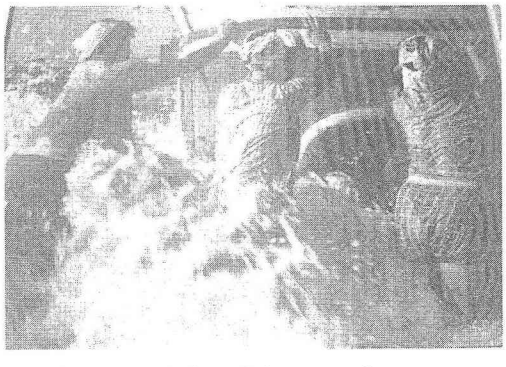

写真-14 ほとばしる波濤の中での「おっぺし」

写真-15　暖をとる「おっぺし」たち

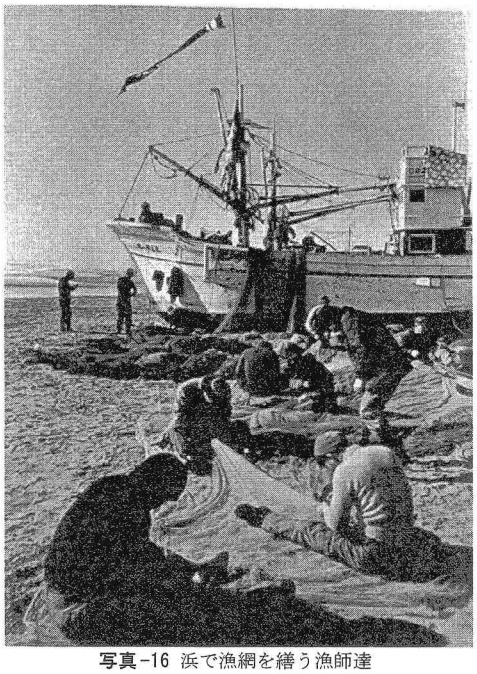

写真-16　浜で漁網を繕う漁師達

写真-17　浜で漁網を繕う漁師達

写真-18　お櫃から長い箸でご飯を食べる男の子

に水中作業をしていた．綿の衣類から，ゴムの合羽が着られるようになる程度の改善であった．そのため，海岸で焚き火をして暖をとったり衣類を乾燥させた．現在の日本では考えづらい労働形態が昭和40年代まで続いていた．一方，現在80歳代近くのおっぺしだった今泉浜の女性たちのヒアリングでは，過去は大変だったが，思い出したくないほどの過酷だったという記憶ではないようである．むしろ，漁村全体が大家族のようで，村人が終日チームとして動いておりコミュニケーションが良かったと懐かしむ人も居た．

(8) 浜での漁網の修復と生活(写真-16, 17, 18)

海浜に引き揚げられた漁船の脇で網を繕う多くの漁師達．綿でできた漁網は化繊漁網と比較して破れ易く，頻繁な修理が必要であった．木綿の漁網は濡れていると腐り易いため，使用後には砂浜に広げて乾燥させて長持ちさせていた．修繕も砂浜に座り込んで漁業者自身が行った．漁家の経営上は，巻網など高価な漁具の購入コストを下げるため，広い砂浜が経済的にも必要であった．そのため砂浜の存在は大切であった．しかし，化繊ではその必要がほとんどないため，漁網管理に砂浜は必要ではなくなった．大型巻網の漁家にとっては砂浜は，漁船の出入港を阻害する存在としての側面が強くなっていった．

漁村の女性は終日働きづめであったので，子供を伴っており，育児は祖父母や集落全体が補助していた．砂浜は，女性の職場でもあり，子供たちの保育園でもあった．裸の男の子が，お櫃から長い箸を使って直接ご飯を食べる様子を母親か女性たちが見守っている．男性たちの漁船での昼食用のご飯はお櫃で渡しており，

帰港後にお櫃の中身が残っていると子供たちや女性たちが分けて食べたようである.

3. 考察

九十九里浜で砂浜への住民の認識が大きく変化したのは,木綿漁網から化繊漁網への転換期であった.木綿漁網は漁のたびに乾燥させないと網が腐敗するため干場が必要であり,強度も弱く絶えず網繕(**写真-16**)を行う必要があった.このため広大な砂浜は地域の財産であった.しかし,昭和40年代に漁網の化学繊維化が進むと,干し場としての砂浜の必要性は急速に消失した.

一方,九十九里浜では江戸時代からカタクチイワシを干鰯(ほしか)として肥料とする長い伝統があった.冷蔵保存技術がない時代では,砂浜に漁獲物を直接撒いて干物か肥料にした.特に肥料としての国内需要が大きく,砂浜は工場でもあり,村人が清掃して大切に管理されていた.しかし干鰯も化学肥料の出現により需要が消え,砂浜は漁村経済にとって不必要となり,逆に飛砂発生など面倒な存在と考えるようになった.

さらに,漁船の動力化・大型化に伴い漁港の航路埋没がしばしば問題となった.このように漁民には砂は邪魔でもあった.しかし海岸では地引網(**写真-8**)により,また沖では揚繰網(**写真-3**)による豊かな漁獲があり,女たちは漁のたびに「おっぺし」のため冬季の早朝を含めて砕波帯で漁船を沖へと押し出す重労働を行っていた(**写真-14**).困難を極めた出漁時の肉体労働の過酷さが,漁港整備の要望に繋がり,漁港の整備に伴い女たちは重労働から開放された.

漁港建設側の砂浜への観念を『九十九里町誌』[8]から拾うことができる.戦後の漁船の大型化に応じて,人力では船を砂浜に揚げるのが厳しくなり,ワイヤーに巻き込まれるなど作業中の事故が多発したことから,地元では漁港建設の機運が高まった.同じ九十九里浜沖の漁場を共有する大原や銚子などは岬付近で漁港建設が進み水揚げが容易となったため,他の漁村との格差も心理的に大きな要因となった.1951年には,千葉県漁港協会あての要望書を,漁協組合長と町長が提出し,砂浜への漁港(片貝漁港)建設の検討が本格化した.

砂浜の漁港として同じ問題を抱える愛知県赤羽根に視察に行き,技術的解決とともに政治運動の重要性も指摘されたようである.特に,もともと地元の漁港で第二種であったのを,国庫補助率がより高い第四種漁港へ避難港として位置づけなおして変更した.その結果,地元負担が軽減された.

しかし,防波堤や泊地の建設だけではなく,航路の維持浚渫の地元負担がその後に重くのしかかることとなる.当時の漁港建設担当者であった町役場職員の記録では,「昔のように寒中裸で船を押し出していたら,浜で働く者はもう居なかったであろうに」と,地元負担に不満をもつ若い船主に対して,建設時の労苦を知らぬと嘆いている.

また,漂砂対策の防波堤の延伸も次々と行った[9]が抜本的な解決にならず,「縁を切りたいものである」とある.さらに,漁港建設を技術面から支えた,内務省技官の鮫島博士への尊敬が随所にみられる.技術的難題を地域とともに解決してきた技術者に対する地域からのまなざしは興味深い.

その後,一人の技術者が責任をもって地域に顔が見える方式で,社会基盤を造るような組織ではなくなってきたためか,九十九里町誌や他漁村の地域誌でも戦後の漁港事業が本格化した1960年代の記録が,感謝とともにつづられている点は重要である.

今後の環境計画や社会基盤整備に関わる専門家,技術者や政策担当者にとっては,先人の地域との関わり方を考えさせられる.価値観は時代ごとに変化するとはいえ,問題への対処の姿勢が明快である必要性が痛感される.

4. 結論

九十九里浜では,漁村住民の砂浜への認識が数十年で変化した.このような変遷と同時期に海浜環境にも激変が起き,漁獲量も激減し,九十九里浜固有の自然に応じた歴史文化や風物詩の多くが消えた.将来の九十九里浜像を描くには,環境変遷史をもとに価値観の変動を織り込んでもなお自然環境として一定レベルの状態が保てる指標を明確にする必要があろう.

参考文献

1) 清野聡子・足利由紀子・安部元子・宇多高明:大分県中津干潟における海岸の変遷-写真資料に基づく解析-, 海洋開発論文集, 第19巻, pp. 261-266, 2003.

2) 平野芳弘・清野聡子・宇多高明:古い映像資料に基づく海岸利用形態の復元-海洋性温泉都市別府の写真資料を読み解く-, 海洋開発論文集, 第17巻, pp. 475-480, 2001.

3) 角本孝夫・太田慶正・清野聡子・宇多高明・澤藤一雄・藤田則康:Data-miningによる大畑漁港の変遷調査と沿岸域環境復元のための方策, 海洋開発論文集, 第17巻, pp. 481-486, 2001.

4) 日本財団:日本の海岸はいま‥九十九里浜が消える?—海岸侵食と漂砂, 九十九里海岸巡検, 2001.

5) 日本財団:続日本の海岸はいま‥九十九里浜が消える?—漁港と漁村の変貌, 九十九里海岸巡検, 2002.

6) 清野聡子・宇多高明・酒井英次・吉田哲朗:過去の海岸復元のための映像資料の活用, 海洋開発論文集, 第18巻,

pp. 809-814, 2002.
7) 小関与四郎：九十九里浜, 春風社.
8) 九十九里町誌編集委員会： 九十九里町誌各論編中巻. 1989.
9) 渡辺宗介・清野聡子・宇多高明・芹沢真澄・三波俊郎・古池鋼：防波堤の建設に起因するサーフスポットの形成機構, 海岸工学論文集, 第46巻, pp. 1271-1275, 1999.

HISTORY OF FISHERY AT KUJUKURI COAST AND CHANGES IN HABITANT'S RECOGNITION FOR IMPORTANCE OF SANDY BEACH

Satoquo SEINO, Takaaki UDA, Eiji SAKAI and Tetsuro YOSHIDA

Past photographic records showing lives on the Kujukuri coast facing the Pacific Ocean in Chiba Prefecture were collected. Once there had been wealthy anchovy and sardine fishery grounds along this coast. Since this beach has a very mild slope of 1/70 and is composed of fine sand, fishing boats must be pull up or push out on the sandy beach. Women called 'oppeshi' did this severe task. These hard works gave rise to the willing to build fishing port on this sandy beach. However, after the construction of big fishing port, sardine resources collapsed and fishery villages were at the edge. This sequence gives us lessons for sustainable development.